

与論島における村落の観光地化

堂 前 亮 平

1 はじめに

沖縄本島の北23kmに位置し、周囲わずか22kmに満たない隆起石灰岩の島、与論島が観光地として脚光を浴びはじめたのは1968年ごろのことである。以後、夏の若者の海水浴客を中心として、与論島を訪れる観光客は増加の一途をたどってきた。それに伴い、従来サトウキビを中心とした農業と紬織に大きく依存した島の経済の中に観光が大きな地位を占めるようになり、その結果、島の様相は大きな変貌をとげてきた。

本稿は、1978年9月9日～14日、沖縄国際大学南島文化研究所が実施した与論島の総合調査の報告である。本研究の目的は、与論島の村落に視点をおき、観光地化に伴う農家の対応と村落の変容を明らかにしようとするものである。

与論島の観光についての従来の調査・研究には、観光形態に視点をあてた鈴木公⁽¹⁾の研究があるほか、地域開発コンサルタンツ⁽²⁾による「与論島総合開発診断業務報告書」の中で、与論島の観光振興に関する検討がなされている。前者の鈴木公の研究は1974年に発表されたもので、当時の与論島における観光の全貌が明らかにされており、その後の地域の変容をとらえるのに好都合な資料として、主要な参考文献とした。

2 与論島の観光地化

(1) 与論島の概況

与論島は奄美諸島の南端にあたり、沖永良部島の南方32.5km、沖縄島の北方23kmに位置する面積20.82km²、周囲21.9kmの隆起珊瑚礁の低平な小島である（図1）。

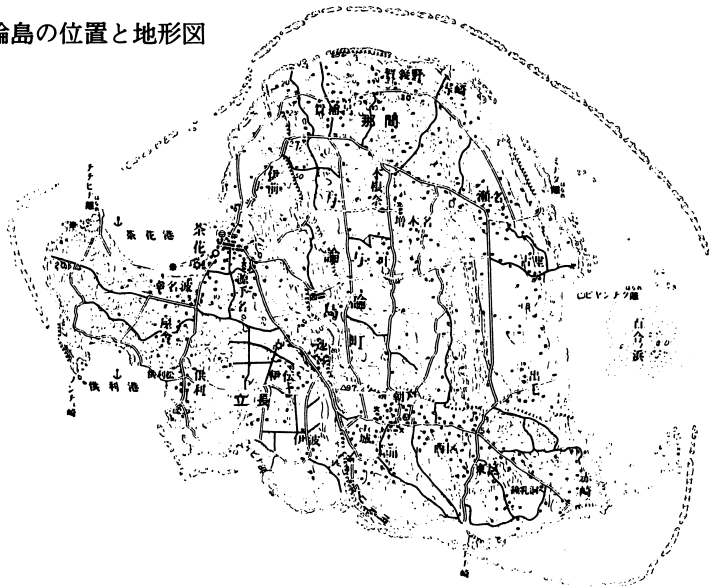
与論島はその地理的位置によって、古くから沖縄との関係が強く、1266年（天永3）からは琉球英祖王に納貢して343年間琉球に所属した。しかし、1609年（慶長14）には島津の琉球への侵入により、薩摩の管轄となり、以後沖永良部に含まれた行政管下におかれた。1945年の終戦により、アメリカ合衆国軍政統治下におかれ、行政は祖国日本と分離されたが、1953年12月25日には日米行政協定にもとづき、沖縄に先がけ日本に復帰した。1963年には与論町制を施行、与論島1島からなる町である。与論町の人口は、1950年の8,283人を最高に1965年ごろまで漸減し、1965年以後は7,000人台で停滞しており、1978年現在7,431人である。与論島の主要産業は、サトウキビ作を中心とした農業と製糖工場および大島紬織、それに近年急速に与論の産業構造

(1) 鈴木公（1974）：観光面からみた与論島。南日本文化、7、15～25。

(2) 地域開発コンサルタンツ（1975）：『与論島総合開発診断業務報告書』鹿児島県大島郡与論町、157～235。

の中で大きな地位を占めてきた観光関連産業があげられる。⁽³⁾⁽⁴⁾

図1 与論島の位置と地形図



(2) 与論島の観光地化と社会的背景

表1は奄美諸島における観光客の動態である。与論島は1977年(昭和52年)に122,081人で、奄美大島の200,403人より下まわっているものの、人口に対する入込観光客数の割合・観光客の増加率では、他の4島と比べて格段の高い割合および増加率を示し、観光化が著しく進んでいることを表わしている。

図2は与論島への入込客数の年推移を示したものである。この図から明らかなように、与論島への入込観光客数は1967年までは、ほぼ5000人ぐらいで横ばいを続けていたが、1968年から上昇傾向を示し、1975年には石油ショックの影響により落ちこんだものの、それ以後はうなぎ昇りの上昇を示している。とくに、1975年以降沖縄からの入込客数が急増していることは注目される。

表1 奄美諸島における観光客の動態

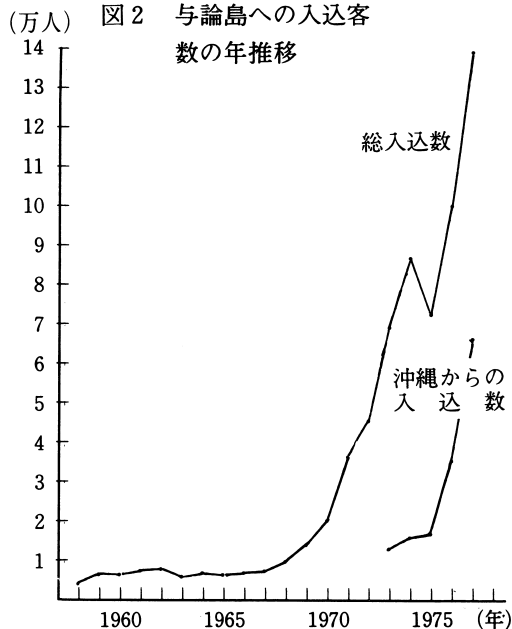
	人 口 1977(昭52)	観光客数 1970(昭45)	観光客数 1977(昭52)	人口に対する 入込観光客数の割合	観光客の増加率 (1970—1977)
奄 美 大 島	84,916人	115,490人	200,403人	236%	174%
喜 界 島	11,430	15,704	16,860	148	107
徳 之 島	35,202	46,597	50,068	142	107
沖永良部島	16,931	24,302	46,971	277	193
与 論 島	7,060	17,359	122,081	1,730	703

資料 鹿児島県大島支庁・奄美群島観光連盟(1978)：奄美群島観光の動向。

(3) 与論町(1978)：昭和53年度町勢要覧『与論』。
(4) 青野寿郎・尾留川正平(1975)：『日本地誌』第21巻。二宮書店、703ページ。

1967年以後、観光客が増加した理由として、
 (5) 鈴木公は次の3点をあげている。すなわち、
 ①1960年ごろからの日本経済の高度成長を背景として全国的観光ブームの中で、奄美地区が観光客受入れの整備がおこなわれた。②若者の風俗とあいまって未開の観光地として、北の知床と沖縄復帰前の日本の最南端である与論が、マスコミの宣伝によって注目された。③ 500トン級の船しか接岸できなかった与論島の茶花港が奄美復興事業により、1964～68年に改修が完成し、3,000トン級の船の接岸が可能となった。新造大型船による鹿児島与論間の所要時間の短縮や運航回数の増便等観光媒体としての交通機関の充実があげられる。

図2 与論島への入込客数の年推移



資料 鈴木公(1974):観光面からみた与論島。南日本文化、7。与論町商工観光課(1978):旅行客入込調査表

(3) 与論島の観光資源と入込観光客の特性

観光を構成する要素のうち、観光資源と観光需要(観光客としてとらえることができる)について、与論島の特性を考察する。まず観光資源は大きく自然観光資源と人文観光資源に分類されるが、与論島の観光資源の特色について、鈴木公は次の4つに分類している。⁽⁶⁾①南方的位置～亜熱帯気候～植物、②隆起サンゴ礁とそれに伴うカルスト地形、③環礁とエメラルド色の海～海水浴適地、④若干の人文的要素である。なかでも与論観光の中核は、東海岸の大金久海岸および百合ヶ浜であろう。大金久海岸は長く続くサンゴ礁の細砂からなる白砂の遠浅海岸で絶好の海水浴場として知られ、干潮時には沖合い1.5kmに「百合ヶ浜」と呼ばれる巨大な洲が現われ、小舟で渡ることができる。また大金久海岸の後背地の砂丘には、1937年から植林された

表2 与論島への月別観光客入込数とその割合(1970年・1977年)

年 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
1970 (昭45)	890 (3.0)	860 (2.9)	2,203 (7.6)	1,784 (6.1)	1,232 (4.2)	1,134 (3.9)	6,688 (23.1)	8,179 (28.2)	1,558 (5.3)	1,481 (5.1)	1,256 (4.3)	1,667 (5.7)	28,932 人 %(100.0)
1977 (昭52)	3,557 (2.5)	3,425 (2.4)	7,843 (5.7)	7,459 (5.4)	11,852 (8.6)	8,995 (6.5)	30,296 (22.0)	36,581 (26.6)	10,754 (7.8)	7,416 (5.3)	5,349 (3.8)	3,860 (2.8)	137,387 人 %(100.0)

資料 与論町商工観光課(1978):旅行客入込調査表

(5) 鈴木公 前掲(1) P. 16.

(6) 鈴木公 前掲(1) P. 17.

表3 与論島における観光客の滞在期間（1977年）

宿泊数	1泊	2泊	3泊	4泊	5泊	6泊	7泊以上	不明	合計
割合(%)	22.1	45.6	21.5	4.7	0.7	0.7	2.7	2.0	100.0

資料 鹿児島県大島支庁・奄美群島観光連盟（1978）：奄美群島観光の動向

モクマオウ林があり、キャンプ場が開かれている。その他の海水浴・キャンプ場としての海岸には、赤崎・品覇・茶花・ウドノス・兼母・皆田の各海岸がある。人文的観光資源として、琉球の北山王の3男王舅（オーシャン）が築城したといわれる与論城跡がある。その他3・8・10月の15日には、豊年祭が行われ、与論十五夜踊は1971年に県の無形文化財に指定されている。

つぎに、表2は与論島への月別観光客入込客数とその割合を1970年と1977年について示したものである。この表から明らかなように、1970年には7月と8月の2ヵ月間に51.3%を占めていたものの、1977年には48.6%とわずかに構成比は下がり、その分、他の月に分散していることを示している。夏の観光客の大部分は学生や職場の若手グループ層であるが、春・秋には新婚客も目だちは始めている。また、表3は与論島における観光客の滞在期間（1977年）を示したものである。2泊が最も多く、1泊・3泊がこれに続いており、3泊までで全体の約9割を占めている。

3 与論島における村落の観光地化に伴う農家の対応

(1) 宿泊施設の地域的拡大

地域の観光地化に伴って、ホテル・国民宿舎・民宿などの宿泊施設、グラスボード、貸自転車、みやげ店、喫茶・スナック・食堂などの飲食関係等の様々な観光産業が出現する。そのなかでも宿泊施設は最も重要な観光産業の一つである。

与論島が観光地として脚光を浴びはじめた1968年には、宿泊施設は一般旅館が5、ロジ・ユースホステル・国民宿舎が5で一般客収容人数はわずかに100人程度であった。⁽⁷⁾ 若者の観光客の増加にあいまって、民宿は1969年に4軒新設されたのを皮きりに、年々民宿は増加をたどり、10年経た1979年には71に達し、ホテル・国民宿舎・ユースホステル・旅館まで含めて94の多くを数えるに至っている。その分布を部落（区）別に1973年と1979年についてみたのが表4である。この表の中で、茶花の例でみられるように旅館が減少して民宿が増加しているのは、旅館よりも民宿を求める若者観光客に対応して、従来旅館であっても民宿としているためであろう。宿泊施設の総数は62から94と30%の増加を示している。1979年における宿泊施設数では与論町の中心地である茶花が最も多く、41を数え全体の45%を占めている。茶花の宿泊施設数は1973年とほぼ同じであるが、これに対して百合ヶ浜を控えた東区では茶花について施設数が多く、その数も9から28と3倍に増加しており、農家の民宿経営が一層進んで、農村地域の観

(7) 鈴木公 前掲(1) P. 19.

表 4 与論島における宿泊施設

〔左の数字は1979年1月、右の()の数字は1973年7月〕

宿泊施設	部落(区)	茶花	立長	城	朝戸	西	東	古里	叶	那間	計
ホテル		4 (5)	3					1			8 (5)
国民宿舎 ユースホステル		2 (2)	1 (1)								3 (3)
旅館		5 (14)			(1)		1 (4)	(1)		(1)	6 (21)
旅館・民宿		2	2				2				6
民宿		28(19)	7 (3)		2 (1)	3	25(5)	3 (4)		3 (2)	71(34)
計		41(40)	13(4)	0 (0)	2 (2)	3 (0)	28(9)	4 (5)	0 (0)	3 (3)	94(62)

資料 与論町役場商工観光課 (1979)：ヨロン島ガイド

鈴木公 (1974)：観光面からみた与論島・南日本文化、7。

光地化が顕著である。次いで、宿泊施設数が多いのは茶花に近接している立長で、他は古里・西・那間・朝戸の各部落(区)で、2～4軒の民宿があるにとどまっている。このように、与論島において、宿泊施設の集中している地域は与論島の中心地茶花と、百合ヶ浜を控えた東区の2地区を核とした、いわゆる2眼レフ構造を形成している。

(2) 東・古里・西・朝戸の各部落(区)における農家の観光産業への従事形態

前述したように、1968年ごろからの観光客の増加は、1977年には年間12万人余にも達し、島は著しく観光地化が進んだ。なかでも特に観光地化が著しい地域は茶花と東区である。ここでは特に農村地域の観光地化が著しい東区と、東区に隣接する古里、さらに若干の観光化の影景をうけている西・朝戸の各部落(区)をとりあげ、農家の観光産業への従事形態を考察する。

表5—(1～4)は与論町の東・古里・西・朝戸の4部落(区)について、農家の観光産業への従事形態を示したものである。この表はあくまで、農業をおこなっている家が民宿・ホテル・グラスボード・みやげもの店・食堂・スナック・喫茶店・その他を経営しているもののみ示しており、農業をおこなっていないで観光産業のみの場合は示していない。また、夏の間だけ百合ヶ浜での売店出店については表6で示しており、表5のなかには含んでいない。

東区についてみると、1969年以降徐々に民宿が設立されはじめて、1974年の4軒を除けば、年1～2軒ずつの設立をみている。グラスボードをやっている農家は10を数え、そのうち民宿ホテルと合せて経営している農家は4軒である。観光産業に携わっている農家の6割は紬織に、また漁業にも同じくらいの割合で従事している。観光産業・農業・紬織・漁業ともおこなっている農家は約3割の9軒ある。このような複合経営をおこなっている農家の季節的組合せをみると、12月～4月は製糖関係(キビ刈等)、5月・6月はキビ手入れ(草とり・肥料入れ・植つけ)、7月・8月は観光関係、9月～11月は漁業、紬織は観光シーズンを除いた特に6月と9月から11月にかけておこなっている。

古里では、農家の民宿経営は4軒にすぎず、東区ほど民宿地化は進行していないが、グラスボード・みやげもの店・食堂・喫茶店等の観光産業への従事者は多くみられる。百合ヶ浜への

表5-1 与論町東区における農家の観光産業への従事形態

●印は従事していることを示す。()は開設年

従事する 職業	観 光 産 業 関 係					農業	繊維	漁業	雑 貨 店・ 観光関係以 外の専門店	その他 の仕事	
	民 宿	ホテル	グラス ボード	みやげ もの店	食堂・スナ ック喫茶店						その他
1		● (1977)	●	●			●		●		
2	● (1975)						●	●	●		
3	● (1978)						●	●		●	
4	● (1972)		●	●			●	●	●		
5	● (1969)		●				●		●		
6	● (1971)		●		●		●	●	●		●
7	● (1977)						●	●			
8	● (1975)						●	●			
9	● (1974)						●				
10	● (1973)				●		●		●	●	
11	● (1974)						●		●		
12	● (1971)						●				
13	● (1976)						●	●			
14	● (1972)						●	●	●		
15	● (1970)						●	●			
16	● (1974)						●				
17	● (1977)						●	●	●		
18	● (1974)						●	●			
19	● (1970)			●	●		●		●	●	
20			●				●	●			
21			●				●	●	●		
22			●				●	●	●		
23			●				●	●	●		
24			●				●	●	●		
25			●				●		●		

1979年9月 聴きとり調査による

表 5－2 与論町古里における農家の観光産業への従事形態

●印は従事していることを示す。()は開設年

仕事 する 農家	観 光 産 業 関 係						農業	紬織	漁業	雑貨店・ 観光関係以 外の専門店	その他 の仕事
	民 宿	ホテル	グ ラ ス ボ ー ド	み や げ も の 店	食 堂 ・ ス ナ ッ ク 喫 茶	その他					
1	●(1971)						●				
2	●(1975)		●(1970)	●	●	●	●	●	●		
3	●(1976)						●	●			
4	●(1979)						●				
5			●(1972)				●	●	●		
6			●(1973)	●		●	●	●			
7			●(1978)				●	●	●		●
8				●(1979)			●	●			
9				●(1977)	●		●	●			
10					●		●	●			●
11					●(1978)		●	●			●
12						●	●	●			●

1979年 9 月 聴きとり調査による

表 5－3 与論町西区における農家の観光産業への従事形態

●印は従事していることを示す。()は開設年

仕事 する 農家	観 光 産 業 関 係						農業	紬織	漁業	雑貨店・ 観光関係以 外の専門店	その他 の仕事
	民 宿	ホテル	グ ラ ス ボ ー ド	み や げ も の 店	食 堂 ・ ス ナ ッ ク 喫 茶	その他					
1	●(1973)						●	●			●
2	●(1977)						●	●			●
3	●(1975)						●	●			

1979年 9 月 聴きとり調査による

表 5－4 与論町朝戸における農家の観光産業への従事形態

●印は従事していることを示す。()は開設年

仕事 する 農家	観 光 産 業 関 係						農業	紬織	漁業	雑貨店・ 観光関係以 外の専門店	その他 の仕事
	民 宿	ホテル	グ ラ ス ボ ー ド	み や げ も の 店	食 堂 ・ ス ナ ッ ク 喫 茶	その他					
1	●(1972)						●				

1979年 9 月 聴きとり調査による

表 6 与論町の各部落（区）別百合ヶ浜への売店出店数

1979年 9 月現在

部落(区)名	茶花	立長	城	朝戸	西区	東区	古里	叶	那間
売店出店数	5	0	2	5	4	16	17	0	0

資料 与論町役場商工観光課

売店出店も東区を上まわっており、一番多い。農業・観光産業関係以外では、漁業従事者は以外に少ないが、紬織をやっている農家の占める割合は9割余を示している。

西区・朝戸の各部落（区）では、東・古里のように農家が観光産業に関係していない。これは部落の位置的なことに起因する。西区では、3農家が民宿を経営しているが、ここでも紬織を合せた複合経営である。

(3) 農家の民宿経営の事例

表7は農家の民宿経営の事例を示したものである。A民宿・B民宿とも比較的規模の大きなものであり、A民宿の場合は3年連続増築しており、B民宿も別の地にさらに新築して、それぞれ収容規模を拡大している。客の受入れについては旅行業者と協定を結んでいるのが一般的であるが、グループで直接申しこんでくる例や、客の紹介による申込みもみられる。旅行業者には宿泊料金の中から斡旋料を支払っている。旅行業者の方から宿泊施設に関して様々な要求があり、このことが、民宿施設のデラックス化を促進させている一因でもある。反面、シーズンは夏の2～3ヶ月であり、おもての華やかさとは裏腹に経営は厳しさを増しているという。

表7 農家の民宿経営の事例

(1978年9月、聴きとり調査による)

項目		民 宿	A 民 宿	B 民 宿
(1)家族構成			夫婦・祖父	夫婦・長男夫婦
(2)経営農地面積・作物			約2ha・さとうきび	約1ha・さとうきび
(3)紬織			やっている	やっている
(4)漁業			やっている	やっていない
民 宿	①開設年		1975年	1970年
	②収容規模		76人	100人
	③増築		1976年・1977年・1978年にそれぞれ増築	1977年百合ヶ浜に新築
	④民宿開設のための資金		商工会その他	奄美信用金庫 その他
	⑤宿泊料金		3,000円（1泊2食）	1978年 3,000円（1泊2食） 1977年 2,800円（1泊2食）
	⑥シーズン中の従業員		アルバイト2人 新威の人	アルバイト6名 学生（東京4人・大阪2人） アルバイト料1,000円～1,500円
	⑦送迎バス		9名乗り1台、 10名乗り1台（1977年購入）	25名のり1台（1970年購入） 10名のり1台（1977年購入）
	⑧協定旅行社		日本旅行 その他	日本交通公社 その他
	⑨年間総収入に占める民宿収入の割合		8割	3割（雑貨店もやっている）

4 若干のまとめ

与論島は、1968年ごろから若者を中心とした海水浴客によって、観光地化が著しく進んできた。その結果、従来の農村地域も大きな変質変貌をとげてきた。とくに観光地化が顕著なのは島の行政の中心地茶花と百合ヶ浜の海水浴場をひかえた東区である。従来、さとうきび作を主体とした農村地域であった東区では、観光化の波によって、農家の民宿経営をはじめ、観光関連産業従事者が増加してきた。農家は12月から6月までは主としてサトウキビの農業に従事し、夏は観光、その間を縫って漁業や女性による紬織がなされ、年間のサイクルの中でうまく複合経営を成りたててきた。しかし、一方では民宿のデラックス化・大型化はそのまま経営の厳しさを招いている。古里・西区・朝戸では、その位置からして東区のように民宿地化は進行していないが、古里では民宿以外の観光産業への従事が顕著である。

(本論に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を使用したものである。)